

第8回奈良ESD連続セミナー

- ◇開催日時 平成28年11月29日(火) 19時～
- ◇会場 次世代教員養成センター2号館 多目的ホール
- ◇参加者 山方・三木(都跡小)、大西・池見(飛鳥小)、西口(平城西小)、池見(大宮小)
中村・今井(済美南小)、石田(済美小)、蔵前(真美が丘第一小)、河野(富雄第三小中)
島(郡山西小)、新宮(平城小)、北村・黒木・堀口(奈良教育大学) 16名

◇内 容 指導案の検討

1、「郷土の発展に尽くした人々」 ～川路聖謨～

指導についての中でESDの視点からつけたい力として「コミュニケーションを行う力」・「多面的・総合的に考える力」・「つながりを尊重する力」・「未来像を予測して計画を立てる力」を記した。



- 中村 ・学習過程の「見つめる」「調べる」「ふかめる」「ひろげる」や単元の構想の表記が分かり易くされている。
- 三木 ・最終目標は川路聖謨の学習を通して「自分たちに何ができるか」から「何か」の所で「何でもよい」のだろうか。川路聖謨の活動をキーワードとして100年後の奈良の為に自分たちができることや残っていてほしいことを考えてはどうなんだろうか。
- 大西 ・4年生には100年後の奈良の姿をイメージするのは難しいが、こんな奈良になってほしいという思いを巡らし、できることを考え、活動することはESDの視点からもよいのではないのだろうか。
- 山方 ・「評価について」の項で川路聖謨の願いに気付いていたらなぜ「知識・技能」なのか。
・10/12時間目の本時の目標で「・・・について自分の考えを深める」が漠然としているので、本時案下記の「指導者として押さえないこと」の中で何を持って深まったかを具体的に書いておくのがよい。
・11/12時間目の目標で、「…について話し合う」とあるが、話し合っって川路聖謨の思いなどにふれさせるのが目標ではないのか。「指導者として押さえないこと」も漠然としているので、目標に準拠した評価を行う上でもう少し具体的に書いた方がよいのではないのだろうか。
・「本時に指導者として押さえないこと」を記すことは、参観者・授業者にとっては分かり易く良い考えだと思う。
- 池見 ・川路聖謨がいろいろな政策を打ち出し(含桜の植樹)どのような思いで政治をおこなった
- 大西 ・のかを知ることによって今につながっていることを理解させたい。
・確かに「話し合う」では弱く、話し合いの中では実現不可能なことも出てくると思うが、12/12で11/12での話し合いの内容が100年後の奈良の為につながるののだろうかを考えさせていくつもりである。
- 石田 ・一番つけたい力は何なのかという視点から見ると評価の数が多いのではないか。

- 大西 ・単元目標をさらに具体的に表していったものが評価規準に記されており、本校では本時案では授業レベルにおいてさらに具体的な文言で表記している。
- 山方 ・評価は国研の評価規準を参考にしていけばよいのではないか。
- 今井 ・「ねり合う」という言葉を初めて見たので、教えてほしい。
- 河野 ・同じことを調べても子どもによってとらえ方が異なる場合がある。それらを出し合うことを通して、考えの変容を促し見方・考え方が深まっていくことを「ねり合う」という言葉を使って表している。

2、伝統野菜をE S D教材に ～小学4年社会科「県の広がり」を中心として～

農林水産省のHPの伝統野菜について記されている中から「その土地の気候風土にあった野菜」「地域の食文化」「地産地消」「旬の時期しか生産できない」の言葉に目を向けたい。

- 河野 ・伝統野菜をこの単元するにはデメリットで書いてあるように、どうしてもぶつ切りになってしまうのではないだろうか。総合的な学習で取り扱った方が、4つの言葉が生きてくるのではないだろうか。
交通とか地域でつなげていくとすると、伝統野菜の持つ歴史などは薄れてしまうのもったいない。
- 新宮 ・最初に伝統野菜を一つだし交通機関等の資料を基にその地域を探すことから入っていったらどうだろうか。
- 山方 ・「県の広がり」の単元から考えて、一つに貫くことができないのではないだろうか。
- 三木 ・伝統野菜が流通しにくい原因や作っている人の思いなどをとりあげて追究していけばこの単元では取り扱いにくい。総合的な学習での実践がいいのでは。
・E S Dの視点から考えれば、スキルの教材として扱ってもよいのでは。
- 西口 ・一つだけ取り上げて、気候などの自然・地理的条件を調べ「そこで作られている理由」を考えさせて他地域にもないのだろうかと広げていってもよいのではないか。
- 池見 ・学習問題で「…特徴があるのだろう」ではなくて「紹介しよう」としたら、子どもたちの調べ学習にも深まりが出てくるのではないか。
・例えば、宇陀金ごぼう一つに絞って、宇陀の農業を展開する中で宇陀金ごぼうを作っている農家の人々の思いなどを追究していけばどうだろうか。
- 大西 ・「その土地の気候風土にあった野菜」「地域の食文化」「地産地消」「旬の時期しか生産できない」の4つのキーワードは大切のものと思う。この言葉を生かして授業展開するには、この単元では難しいのではないか。社会科で実践するならば5年生、4年生とするならば総合的な学習になるのではないだろうか。



- ※ 指導案の形式をもう一度合わす必要な部分もある。
- ※ この大和野菜はE S Dの視点から見ても価値ある教材なので、再度学年、領域を変更して作っていただきたい。